たのではないか」。石黒はこのように推測する。近年、父の夢をよく見るようになった。「『こっちへ来い』といっているのかなあと思いながらも、『まだ行けない』」と夢の中で答えている。

人間性を磨いた大学時代

大学は、名古屋工業大学建築学科に進んだ。

石黒にとって、幼少期に慣れ親しんできた自然は、5感を刺激し「生」を実感させてくれる存在だったのではないか。建築にも自然を生かすことはできないかと考えるようになる。建築に対して独特の感覚をもつようになり、「機械（設備）が自然との接点を拒否しているのではないか」というような思いを強くしていった。それはやがて「設備をなくすというのが私の活動の原点」と話すまでに強まっていく。

大学では、環境工学の第一人者だった宮野秋彦教授の研究室に所属する。同研究室には15項目からなる「実験研究上の心得」というのがあった。具体的な実験テーマ・内容というよりも、人間性を磨くためのあり方を示したものである。この心得は、「人間・石黒を形成する上で大きな影響を与えた」と振り返る。

特に心得10から15までの6項目は、人間性を磨き研究者としての質を高める上で、重要な点を指摘しているのではないか。

10. 一度や二度の失敗にくじけぬこと。実験は何回繰り返しても、最後に成功すればよい。むしろ、失敗の後、白紙に戻して陣容を立て直す速さに問題がある。

11. 実験研究に当たっては、労を惜しんではいけない。およそ工業研究者として労を惜しむ者はその資質において劣ることは甚だしいと言わねばならぬ。

12. 実験中にメモした記録結果はもちろん、単なる記憶のための紙片でも完全に不用となるまでは丁寧に保管すること。

13. 常に自然の現象の前に虚心であること。

14. 自分の頭で考え、自分の言葉と文字で実験研究の結果を発表すること。

15. 実験研究を行うに当って最も大切なことは、先ず、人間として立派であること、そして常に謙虚であること。

人間性を磨きながら、石黒は卒業へのステップを駆け上がっていく。ちなみに名古屋工業大学の卒業設計は、A0判の大きさで図面を提出しなければならなかった。しかし、石黒が見渡す限りA0判の図面に対応できるような製図版を売っている店は見当たらない。そんなとき父・兼次郎が棟梁としての腕前を発揮し、製図版を手づくりしてくれた。こうして1962（昭和37）年、石黒は名古屋工業大学を卒業する。

父への感謝を忘れないため、製図版は今でも事務所に飾っている。

父手作りの製図版に貼りつけたマンハッタンの航空写真